

# 竹富島研究最終報告

社会科専修2年次

平良泉乃

## 1. テーマ：竹富島の観光「町並み保存」

観光は、人工美、自然美、人情美が備わっているところが成功するのではないかと考える。このすべてを満たした竹富島は、まさに観光に適した島であるといえる。

前回の教材では、観光客数・観光コース・宿泊施設数などを取り上げていたが、今回は前回の再調査とともに、「町並み保存」について調べてみたいと思う。

## 2. テーマ設定の理由

竹富島には赤瓦の町並みが保存されており、これが観光客をひきつける大きな魅力のひとつとなっている。「新沖縄の観光名所百選」では町並みの景観が4位にもなっている。ただし、この伝統的な町並みは、島民が意識的に残しているのもであって、決してたまたま残っているのではない。それは過去から継承された物理的な建造物群の保存ということだけに留まらず、島の人々の島に対する思いを象徴するものである。しかし、そこに住んでいる島民には大変な苦勞があるはずである。また、費用が多くかかることも分かった。そのような問題点に対し、どのように対処しているのか疑問に思い、このテーマを選んだ。

## 3. 出典

- (1) 全国竹富島文化協会「星砂の島 第5号」福田珠巳 2001年 45p～50p、週刊タイムス住宅新聞第728・729号 82p～83p
- (2) 萩市教育委員会 『竹富島の集落と民家：竹富島伝統的建造物群保存地区保存計画見直し調査報告』2000年3月 全国伝統的建造物群保存地区協議会 pp.4-58
- (3) 全国伝統的建造物群保存地区協議会 『未来へ続く歴史のまちなみ—伝建地区とまちづくり』 pp.241-249 2001年3月
- (4) 文化庁文化財保護部建造物課 「歴史的集落・町並みの保存」 2000年 270p
- (5) 京都大学三村研究所 「竹富島の民家と集落」 1985年 24p
- (6) 宮里智士 「町並み保存のネットワーク」 1987年 301p
- (7) 文化庁文化財保護部建造物課 重要伝統的建造物群保存地区ガイドブック「歴史的集落・町並みの保存」 2000年 270p
- (8) 竹富小中学校 「研究紀要」 1999年 119p 121p
- (9) 建築とまちづくり編集委員会 「建築とまちづくり」「歴史的町並み保存と観光の両立」 上勢頭芳徳 22p～26p
- (10) 九州大学出版会 坂本磐雄著 「沖縄の集落景観」 1989年 258p～265p

- (11) 沖縄景観研究会 「沖縄の景観」 「竹富町の集落景観の保存」 備瀬ヒロ子 1990年 64p～69p  
 沖縄県竹富島の事例から-」 森田真也 1997年 33p～65p
- (12) 読売新聞西部本社編 「歴史の町並み再発見」 1993年 128p～132p
- (13) 日本民俗学会 「日本民俗学」 「観光と「伝統文化」の意識化」
- (14) 竹富島鬼宝院蒐集館 「竹富島に何が可能か」 1996年
- (15) 福田珠己 「赤瓦は何を語るか」 1996年 727p～741p
- (16) 観光自然保護団 「竹富島の民家と集落」 1976年
- (17) 竹富公民館 「竹富島憲章」 1986年
- (18) 京都大学三村研究所 「竹富島の民家と集落」 1985年
- (19) 宮沢智士 「町並み保存のネットワーク」 1987年
- (20) 沖縄教育学会 「沖縄教育研究」 「生涯学習まちづくりとしての町並み保存の意義と可能性に関する一考察」 石岡久仁文 1994年 11p～16p
- (21) 上勢頭同子 「町並み保存を考える」 琉球学集説 新聞切り抜き156 1984年2月18日
- (22) 八重山毎日新聞 2002年8月17日 第17237号 土曜日レポート
- (23) 八重山毎日新聞 2001年1月10日14版
- (24) 琉球新報 2001年8月25日
- (25) 竹富町役場ホームページ  
<http://www.town.taketomi.okinawa.jp/view/maini.htm>
- (26) 日本全国レトロな町並みめぐり  
<http://www1.odn.ne.jp/cbi91850/>
- (27) 沖縄タイムス 人物  
<http://www.okinawatimes.co.jp/jin/20001017.html>
- (28) 南風  
<http://www.ryukyushimpo.co.jp/hae/kaze06/h990210.html>
- (29) 『竹富島の集落と民家：竹富島伝統的建造物群保存地区保存計画見直し調査報告』  
 2000年3月、pp.4-58
- (30) きらめきの21世紀  
<http://www.cosmos.ne.jp/~mainichi/monthly/50th/46.htm>

#### 4. 項目

竹富島の「町並み保存」の住民の意識とは？

##### 下位項目

- ・赤瓦の民家はいつごろから作られるようになったのか？

18 世紀中ごろだされた「与世山親方八重山島規模帳」には当地方における屋根瓦の使用を制限する令達が記されており、このような旧慣は、20 世紀初頭、人頭税廃止まで温存され続けていた。屋根瓦使用の制限が解けた後も、高価な屋根瓦に急速に変わっていくことはなく、1960 年代になっても、主屋の約 4 割は茅葺きであった。明治 38 年に最初の瓦葺の家が建てられた。赤瓦屋根が増加していくのは、伝統的町並み保存運動に伴ってのことである。つまり、伝統的町並み保存運動が目指すべき赤瓦屋を中心に据えた伝統的町並みは、かつて存在しなかった、理想としての姿である。町並みの保存は、決して、過去の再現ではないのである。

→ (1) p47 より

・八重山の瓦の歴史は？

八重山における瓦の歴史は、瓦職人を沖縄本島から招請した元禄 8 年に始まった。大戦後は住宅の新築ブームによって生産が追いつかない時期もあったが、セメント瓦の出現や、台風に強い鉄筋コンクリート造の建築が始まってからは次第に需要が減り、1965 年ごろに永い歴史を閉じた。

→ (1) p83 より

・いつごろから、誰が町並み保存運動を始めたのか？

高度成長末期、1960 年代から過疎化が進み、島の経済も行き詰まり、1970 年代には牧場の共同経営と銘打った外部の企業による土地の買占めが行われていった。土地は特定の個人に集まるように計画されており、牧場の共同経営が頓挫した後、複数の企業の転売によって土地の価格は上昇していき買戻しは不可能になっていく。結局、企業に買い上げられた土地は気が付くと島の総面積の二割以上にも及んでしまったという。このような外部からの開発に気がつき危機感を強めた住民は、1972 年 5 月に「竹富島を生かす会」を結成し、開発防止の住民運動を展開していった。この中心になったのが島の寺の喜宝院住職、私設博物館喜宝院蒐集館の館長で郷土史家の上勢頭亨と町会議員を務めた弟昇である。

しかし、実は「伝統文化」の意識化と復興は住民側単独でなしえたものではない。その大きなきっかけを作ったのが、1957 年に初めて島を訪れた、倉敷民芸館館長の外村吉之助以下民芸運動家たちである。当時従来への生活は改善されるべき存在でしかなかった。そこで、島を訪れた外村以下民芸運動家たちは竹富島の伝統文化を絶賛し、島民にそれを訴え、中央に「民芸の島」として紹介した。

→ (9)・(13) より

・年間でのどのくらいの瓦が使用されるのか？

公共事業の一部を除き、約 3 万枚程度で、ほとんどが古い民家から取り外した古瓦で対応している。

→ (1) p 83より

・収集ネットワークはどの程度すすんでいるのか？

石垣島では年間 50~60 件程度の瓦葺の建物が解体撤去されている。その中には移築しても十分使用できる建物もある。しかし、半数ほどが重機などにより無造作に解体され、揚げ句は産業廃棄物として処分されている。

古材の収集は、設計事務所、建築士会員の協力を得て解体物件の情報を提供してもらった上でやっている。その件数は年間約 30 件にも上る。赤瓦のほかに家屋の構造材や屋根の下に敷く細いタケ、あるいは井戸を囲う大きな石なども、再利用のために保管している。イヌマキ材、けた、はり、柱なども石垣島内よりもらい受けている。

→情報の収集、人的交流、技術者の育成、再利用可能な材料のストックなどのシステムも必要

→ (1) p 83より

・町並みを保存するために、どんな決まりや組織（条例など）があるのか？また、それは現在の竹富島でどのような役割を担っているのか？

(1) 「竹富島憲章」(1986年2月)(3月に公民館定期総会において承認)→10年以上前に「竹富島を生かす会」の手によって起草されていた。基本理念は「(土地を)売らない」「(島を)汚さない」「(風紀を)乱さない」「(景観を壊さない)」「(伝統文化を)生かす」の五つ。

公民館長の諮問委員会→憲章検討委員会→公民館議会→公民館総会の四段階で決定した。

(2) 「竹富町歴史的景観形成地区保存条例」(1986年3月)

→竹富島の集落を「伝統的建造物群保存地区」、集落以外の竹富島全体(リーフまでの海域を含めて)を、「歴史的景観保存地区」に指定して、集落景観を守り育てる取り組みをスタートさせた。

(3) 「竹富島まちなみ保存調整委員会」→1986年の総会では、「竹富島憲章」の制定のほか、町並みの現状変更申請に関する地元協議会として、公民館組織内に「竹富島集落景観保存調整委員会」を設置することが決まった。この委員会に対しては、その権限等について一部の反発があり、1988年には公民館から一度は分離されたが、現在では「竹富島まちなみ保存調整委員会」と改名し、公民館を構成する組織として正式に位置づけられている。

この調整委員会は、月に1回開かれ、主として現状変更申請があった物件について審査し、必要な場合は設計変更を要請する。審査の基準となるのは「竹富島景観形成マニュアル」である。

調整委員会のメンバーには、比較的若い30~40代の人が多い。合意形成を円滑に行うことを第一義とすれば、こうした若い人々が少ないほうがよいは

ずである。なぜなら、規範的マニュアルをもとにして町並みを保存していく調整委員会のやり方」に対して、保守的であると反発しやすいからだ。それでも、この調整委員会に若い人が多いのは、そうした人たちにとっての教育機会と捉えられており、積極的に委員に登用することで、町並み保存に責任を持つようになることが期待されているようだ。

(4)「竹富町景観形成マニュアル」→1992年度から2年間かけて調査・分析し、島民との協議を経て作成された。集落に存在するすべての建造物や環境要素を実測し、その分析から伝統的景観のもつ空間秩序や形態の特徴を明らかにすることで、竹富島の景観形成にあたっての規範を示した。

(5)全国で24番目の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。(1987年4月)

(6)「竹富島景観形成の手引」

(7)竹富町まちなみ保存基金条例制定「まちなみ保存基金」スタート(1989年)→目標の2億円には程遠いのが現状。(13年3月31日現在86822044円)このうち400万円は町の一般会計からの繰り入れ、5000万円はふるさと創生資金、2462万円が企業や個人、団体からの寄付となっている。

募金窓口の町教委によると、99年度は14件(40万円)の寄付があったが、不況の影響からか、2000年度は5件(52万円)、2001年度は4件(21万円)と年々減少しつつある。

→(1)、(13)、(14)、(15)、(17)、(22)より

・「竹富島まちなみ保存調整委員会」へはどのようなときに届けるのか？

- (1) 不動産を売買しようとするとき
- (2) 所有者が、指名・住所を変更しようとするとき
- (3) 土地の地番、地目、地積に異動を生ずるとき
- (4) 賃貸借をしようとするとき
- (5) 建造物の新・増・改築・取り壊しをしようとするとき
- (6) 島外所有者の土地に建物等が造られようとするとき
- (7) その他風致に影響を及ぼす行為がなされようとしているとき(映画、テレビ、その他マスコミの取材も含む)

→(17)より

・車が集落を走ることによって、具体的にどのように変わったのか？

1975年ごろから、白砂と石垣の道は拡幅され、石垣の緩やかなカーブは直線に変わった。

→(16) p17より

・漆喰って何？

消石灰、または貝殻を焼いて作った灰に、ふのりなどを練り合わせたもの。壁や天井などの塗料として用いる。

→現代国語辞典より

- ・竹富島にはどれくらい瓦の種類があるのか？

- (1) 伝統瓦（一番ノーマル）
- (2) 伝統瓦（女大瓦）（首里城正殿に使用された瓦）
- (3) 伝統瓦（男瓦と女瓦が合体したもの）
- (4) 新方式の伝統瓦（男瓦に飾り）
- (5) 黒瓦（本土の本瓦）

→（8）より

- ・政府からの助成金はどれくらいか？

予定額 90 万円

その他、国の重要伝統的建造物群保存地区内で、建造物にかかわる修理や変更に対しては、国や県の補助を受けられる。受けられる補助金は、国 80%、県 10% の補助、総工事費の上限は 600 万円までである。

→（18）より

- ・なぜ町並み保存はお金がかかるのか？

補助金のシステムとして、「国→県→町→建築会社→個人大工」となっていて、建築会社が邪魔になっている。

漆喰にひびが入り、雨漏りする。そのため、三年に一度くらいは屋根の補修が必要。

→（8）p 120 より

- ・どうすればお金がかからないのか？

- (1) 国の宮大工や島にいる大工と直接契約する。
- (2) 木材の輸送費を安くするため、西表や島の中の木材を使う。
- (3) 竹富に建築会社を作る。

[坪単価の差]

竹富 17 坪／約 1000 万円

大和 17 坪／約 700 万円

↓なぜか？

大工の日当、木材費の差。

→（8）p 119、（16）より

- ・竹富島の一般的な民家はどのようなつくりになっているのか？

各集落の入り口にはスンマーセ(集落の入り口にあって樹木が植えてある)が形成されている。集落内の屋敷地は、ほとんどが南に入り口を構え、このため東西に数戸の敷地が並んで一つの区画を作っている。各敷地の広さはほぼ平均しており、敷地一列ごとに東西の道が通るので、集落内の道は密でしかも整然としている。道路は白砂が敷き詰められている。

各敷地は、周囲にさんご石灰岩のグック(石垣)を1.5m前後の高さに積んで区画している。フーヤと称する主屋が敷地のほぼ中央部に立ち、その西側には事棟であるトーラを配する。いわゆる分棟型である。トーラの背後に物置やオーシ(豚小屋)を設ける家もある。フーヤの前で入り口との間にマエヤシと称する目隠しを設ける。敷地の周囲にはフクギなどの屋敷樹を植え、また建物背後に畑を作る家もみられる。フーヤは方形に近い横長の平面をもち、軒高低い寄棟造の平屋建で、赤瓦で葺く屋根は勾配が比較的緩い。屋根瓦は強風に対処するため漆喰でとめる。外壁は板張りで、開口部に雨戸を立てる。トーラは通常フーヤの西側に妻を南に向けてたつ小規模な奇棟造の建物で、平面は長方形である。軒高はフーヤより低く、簡素な造りとするのがふつうである。原型は玄関がなく、縁側を通して座敷に上がる。フーヤ、トーラなどの伝統的建築物のほか、集落内には村カー(共同井戸)が各所にある。

屋敷囲いは、サンゴ石灰石による従来の野面積みとする。

→ (11)、(17) より

- ・竹富島で一番古い民家は？

瓦家の一番古いのは明治38年、東金城さんの家

→ (8) より

- ・どの程度保存修理事業が進んでいるのか？

平成12年度末で70件の保存修理が行われた。保存物件112件のうち、約63%の保存修理が完了したことになる。また、町の単独事業として、非伝統的の家屋の修景事業も行っており、島の景観もよい方向に変わりつつある。

→ (1) p82 より

- ・古瓦の特徴とは？

近年の工場生産の瓦と違って、形や色が均一でなく、漆喰塗りの面積も大きく、瓦一枚一枚の濃淡がはっきりしている。その「不ぞろい」であることが、逆に美しく特徴のある景観を作り出している。また、軒先の見え方も役瓦を使用せず、漆喰で塗り固めているため映えて見える。

→ (1) p82 より

- ・ヒンプンの役割とは？

- (1) 強風をさえぎる
- (2) プライバシーの保護
- (3) 儀礼的意味 訪問者は、ヒンプンの前に立って心構えをし、服装を改めてから庭へ足を踏み入れる。
- (4) 身分格式の反映 ヒンプンの幅の長いものほど、その家の身分が高い。
- (5) 庭空間の演出
- (6) 入り口から家屋に入るアプローチの空間構成に果たす役割 無限の味わ

いを生む。

→ (16) より

- ・そのほかの町並み保存の活動は？

電話用の電柱を撤廃し電話ケーブルの地下埋設の工事が進行中であり、建築用材を確保するため森林組合を作り植林を行っている。

→ (13) p48 より

- ・民宿の収容者数はどのくらいが妥当か？

150~200名 (上勢頭芳則氏 1996年) →現在は民宿が14件に増えたので増加か？

問題点：水、ゴミの問題、労働力

→ (14) p95 より

- ・周回道路はどれくらいのスケールで考えられているのか？

重要伝統的建造物群保存地区、34ヘクタール外周で、東部落、西部落、仲筋部落を囲む形。できるだけ既存の道路を使いたい。

→ (14) p113 より

#### 聞き取りによりわかったこと

- ・十字路が多く、石垣で交差点での見通しが悪いが、交通事故などは起きているのか？

小さいものはあったかも知れないが、特になし。

- ・トイレはすべて水洗なのか？

西塘御嶽一つ以外はすべて水洗

- ・電線の地下埋設は進んでいるのか？

まだ着工していない。

- ・コンクリートの上から赤瓦を乗せた家や、茅葺の家でも補助金が出るのか？

補助金有り

- ・道に植えられている花の苗などに補助金が出るのか？

補助金なし。自己負担

- ・観光客による問題はなにか？

ごみの持込、マナーの悪さなど

- ・公民館協力費はどのような規定で集めているのか？

自家用車、送迎、営業車、事業所、貸し自転車、水牛車、喫茶・食堂、おみやげ品店、旅館・民宿から 合計1194000円 (2001年度)  
(公民館協力費は、祭りには一切使っていない。使われていると誤解していた住民が多かった。)

- ・町並み保存調整委員会の役員として、集まりは定期的にあるのか？

各部落ごとに毎月15日。そのなかの代表が24日に調整委員会へ



- ・整備事業はどのように順位付けられているのか？  
本人の希望を考慮し、自己負担などの話し合いも行われるが、壊れそうな急ぐ家から優先
- ・住民からの要望、苦情にはどのようなものがあるのか？  
物置や小屋などでも申請しないといけないのが苦情
- ・現在の景観保存基金の額はどのくらいか？（目標2億）  
86822044円（13年3月31日現在）
- ・今も、瓦を葺く職人さんは石垣島から連れてきているのか？  
石垣から連れてきている。
- ・ごみの処理はどのようになっているのか？  
ごみ料金は職業で違う。20年以上前から塵芥処理費徴収。  
旅館900円 民宿900円 商店500円 自販機1台200円  
水牛車1000円  
その他基本的に1軒につき150円 + 一人50円  
空家も1000円

## 5. 聞き取り・アンケートをした人

- ・喜宝院蒐集館館長雑芸員 上勢頭芳徳さん
- ・公民館長 阿佐伊孫良さん
- ・「町並み保存調整委員会」の三部落各4名、合計12名の代表者の方→新田長男さん
- ・町並みセンター
- ・竹富民芸館
- ・竹富小中学校の市原先生、校長先生
- ・ビジターセンター（元県議会議員上間さん）
- ・一般の老若男女
- ・観光に従事する本土からのアルバイトのヘルパーの方
- ・マキ荘→松竹荘→大浜荘→内盛荘→高那旅館
- ・樹庭夢→小浜荘→新田荘→ビジターセンター→新田観光→泉屋
- ・ゲストハウスさふな家
- ・竹富商工観光課
- ・竹富町観光協会
- ・竹富町商工会
- ・竹富町教育委員会生涯学習課

## 質問表の作成

## アンケート調査の結果

年齢 14～97歳： 性別 男36% 女59% 無回答5%：

職業観光業40% 無職26% 無回答・その他34%：

出身竹富島52% 島外40% 無回答8%

①竹富島は好きですか？ 好き97% 嫌い0% どちらでもない3%

②町並み保存について、学校やその他の公共の施設で学んだことはありますか？  
ある56% ない44%

③現在のマニュアルは厳しすぎると感じますか？思う人はどんなところが？  
思わない 56% 無回答18%  
思う 26%（修理がすぐにできない、お金がかかりすぎる、マニュアル通りでは  
住民は生活できない、アスファルトがいい、大きさまで限定されるから）

④住んでいてどんなことで困っていますか？  
（スーパー、病院、銀行がない、船の移動、お金がかかりすぎる、離島差別、格差、など）

⑤シロアリなどの問題はありますか？ ある74% ない26%

⑥防蟻処理をしたことがありますか？ ある67% ない30% 無回答3%

⑦竹富島に来る観光客に、竹富島のすばらしさは十分伝わっていると感じますか？  
思う37% 思わない19% どちらともいえない37% 無回答7%

⑧今でも天水層や井戸を使っていますか？  
よく使っている3% 時々使っている3%（中学校教員が授業で）  
使っていない92% 無回答2%

⑨自家用車を持っていますか？  
持っている48% 持っていない37% 無回答15%

⑩9で持っているとした方は、どこに車を止めていますか？  
（敷地内、駐車場、空き地など）

⑪行政(国)に期待することは何ですか？（上位2つ）  
基金の支援33% 広報活動3% 古材や植林など資源の確保33%  
町並み保存についての法整備26% 環境の保全33% 交通の便15%  
その他（病院、シロアリ駆除の補助、統一した案内（観光業者））

⑫公民館協力費(観光税)についてどう考えますか？  
（義務・必要41% 反対0% よく知らない7% 無回答52%  
高い、祭りに使いすぎ）

⑬高価な赤瓦の家ですが、若者の移住・Uターンは気軽にできていると感じますか？  
できる19% 行政の援助で可能33% 行政の援助があっても難しい40%

ここからは島外出身の方に伺いました。

⑭なぜ竹富島に住もうと思われたのですか？

(島の魅力に取り付かれて、人間の本来あるべき姿、町並み、雰囲気、ゆったりした時間、結婚を機に、など)

⑮以前住んでいた場所との違いは何ですか？

(自然、生きている感覚、すべて、船をよく使う、気持ちがいい、など)

## 6. 新たな視点 —エコ・ミュージアム構想—

町並保存運動を、「生涯学習まちづくり」の素材として考えるとき、「エコ・ミュージアム構想」が、ひとつの指針になる。これは、1971年にフランスのG・アンリ・リビエルによって提唱された、ある地域全体の環境をひとつの博物館として、捉える方法である。それは、「ある一定の文化圏を構想する地域社会の人々の生活と、その自然及び社会環境の発展過程を史的に探求し、自然及び文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを目的とする創造的野外博物館である」と定義され、これまでの博物館が「閉じたミュージアム」と呼ばれるのに対して、「開かれたミュージアム」と呼ばれることもある。それは、単に建物の内と外というだけではなく、地域全体をその空間に組み込んでいこうという意思が働いているように思われる。

エコ・ミュージアムは、その地域の住民が理解を深めるために、自身を見つめる鏡であり、住民はそこから自分たちの住んでいる地域についての説明を見つけようとする。そこには、世代の連続あるいは非連続の中で形成され、それらに先行する住民による地域についての説明が加えられている。その鏡は、仕事や生活、交友を重んじ、相互の理解を増すために住民を映し出す。

日本で行われている町並み保存の運動は、現在のところ、単なるムラオコシ的な傾向が強い。しかし、たとえそれが、観光目的や過疎対策であるとしても、そこに生活する住民にとっては、自分の生活環境と向き合う契機になる。したがって、例えばその場所を「エコ・ミュージアム」として組織することができれば、地域全体を学習空間として捉え直すことも可能である。またそれは、建築物の修理・保存というハードの部分と地域の学習資源を学習する機会を提供するというソフトの部分の両面における地域環境の整備という観点から、「生涯学習まちづくり」の理念にも合致する。それは、これまで「意図せざる教育作用」をもたらしてきたかもしれない空間に意味を与えることによって、そこで行われる学習と学習者の生活が結びついていることを明らかにする。そして、その学習行為が、制度化された教育（学校教育）での学習行為と有機的に連携するとき、学習者の知識は、はじめて生きた知識として獲得されるのである。

→ (20) p 15～p 16より

## 7. 今回の調査でわかったこと・感想

今回の調査では、老若男女均等にアンケートをとったが、年代別に分けて統計をとっても面白かったと思う。しかし、私を感じる限りでは、年代によつての差はあまりなかった

ように思う。

竹富島の人々は島をとっても愛していて、誇りを持っているのだと感じた。したがって、町並み保存のマニュアルや朝の清掃などは苦にならないという意見が多く聞かれた。

竹富島に観光客が集まるのは、沖縄の伝統的な町並みが残されているからだ、だからトタン葺きなど現実的な対応策は認められないとする保守派の考えと、認めようとする現実対応派を、このように対立図式として描くことは可能だが、いたずらに対立点を描きだしても不毛であると考え。なぜなら、双方の目指している理想像はかなり重複しているように見えるからだ。その共通した理想像とは島が『自立』した状態になることだと考える。他の地域とも比較・検証した上で、持続できる観光地として自立への道を開いていくことが重要だと考える。